

子宮頸がん予防ワクチン（HPV ワクチン）



HPV ワクチンの積極的勧奨が再開されました

HPV ワクチンは、平成 22（2010）年 11 月から接種がはじまり、平成 25（2013）年 4 月に予防接種法に基づく定期接種に位置づけられました。が、接種後に重篤な副反応が生じたという報告と報道があり、わずか 2 ヶ月後の平成 25（2013）年 6 月から積極的勧奨を一時的に差し控えていましたが、令和 3（2021）年 11 月に、専門家の評価により「HPV ワクチンの積極的勧奨を差し控えている状態を終了させることが妥当」とされ、原則として令和 4 年 4 月から他の定期接種と同様に、個別の勧奨を行うこととなりました（以上厚労省資料一部改変）。

まれで重篤な HPV ワクチンの副反応について

今から約 9 年前に HPV ワクチン接種後に体の痛みや麻痺などを訴える女性が相次ぎ、メディアで大きく報道されました。

厚労省によると、接種した人 1 万人のうち約 10 人は、接種後に何らかの症状が報告され、このうち、約 6 人は入院など、重篤な症状と判断されています。こうした症状が実際に起きていることは事実でも、その後の慎重な調査でこれが「HPV ワクチンそのもののせいで起きた症状とはいえない」というデータが出ています。国が HPV ワクチンの安全性を確認するために行った調査では、次のような結論が発表されました。

疫学調査（祖父江班） 結論

HPV ワクチン接種歴のない者においても、
HPV ワクチン接種後に報告されている症状と同様の
「多様な症状」を有する者が、一定数存在した。

もちろん HPV ワクチンについて 100%の安全が担保されたというわけではなく、今後も調査を継続する必要があります。HPV ワクチン接種後に、因果関係は分からなくても、多様で複雑な症状が出た場合、どうぞ遠慮なく担当医師にご相談ください。

参考：HPV ワクチン接種後によく見られる一時的で軽微な副反応について

発生頻度	サーバリックス®(2価HPVワクチン)	ガーダシル®(4価HPVワクチン)
50%以上	疼痛(99.0%)、発赤(88.2%)、腫脹(78.8%)、疲労感	疼痛(82.5%)
10～50%未満	掻痒、腹痛、筋痛・関節痛、頭痛等	腫脹(25.4%)、紅斑(30.2%)
1～10%未満	蕁麻疹、めまい、発熱等	掻痒・出血・不快感、頭痛、発熱
1%未満	注射部位の知覚異常、感覚鈍麻、全身の脱力	硬結、四肢痛、骨格筋硬直、腹痛・下痢
頻度不明	四肢痛、失神、リンパ節症等	疲労・倦怠感、失神、筋痛・関節痛、嘔吐等

子宮頸がんは日本で毎年約 3000 名の女性の生命を奪っているがんであり、手術によって子宮を失い、あるいはがん治療の後遺症で苦しんでいる女性はさらにその数倍いることを考えると、子宮頸がん予防ワクチン（HPV ワクチン）は副反応のリスクをはるかに上回る利益をもたらすものと考えます。

HPV ワクチンの定期（公費）接種について

- 定期接種の対象者：小学校 6 年～高校 1 年相当の女性※
- ※誕生日が 1997 年 4 月 2 日～2006 年 4 月 1 日までのかたで過去に HPV ワクチンを 3 回接種していないかたは、2022 年 4 月～2025 年 3 月までの 3 年間、特例で公費接種が受けられます（詳細はお住まいの市町村にお尋ねください）
- 定期接種で用いるワクチン：一般にサーバリックス（2 価ワクチン）またはガーダシル（4 価ワクチン）を使用しますが、**当院では主にガーダシルを使用**します
- 最新の「シルガード 9」（9 価ワクチン）は、定期接種とした場合の安全性を現在厚労省が検討中のため 2022 年度は公費接種の対象外です（100% 自費接種は可能です）

ワクチン接種のスケジュール



- ※1：1 回目接種から 1 か月以上あける
- ※2：1 回目接種から 5 ヶ月以上（または 2 回目接種から 2 ヶ月半以上）あける
- ※3：1 回目接種から 1 か月以上あける
- ※4：2 回目接種から 3 ヶ月以上あける

当院で HPV ワクチンの定期（公費）接種ご希望のかたへ

当院では金曜日午後と土曜日午前中の婦人科外来で随時承っています。HPV ワクチン接種は予約が必要ですので、あらかじめ当院医事課までご連絡ください。

参考：ヒトパピローマウイルス感染症～子宮頸がんと HPV ワクチン～厚労省 HP
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou28/index.html>